
仮面ライダー剣 Another Tale

神崎はやて

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー剣 Another Tale

【Nコード】

N2094K

【作者名】

神崎はやて

【あらすじ】

古のアンデッドが復活することにより始まった、53体のアンデッドが生き残りを賭け戦うバトルファイト。それは一人の青年が、自らがアンデッドとなることでひとまずの終結を見た。

だが、水面下では新たなバトルファイトをに備え、モノリスによる準備が着々と進められていた。

一方、人の世にすっかり溶け込んだ、ジョーカーこと相川始の前に

も、戦いの影が忍び寄っていた――。

仮面ライダー剣の、劇場版とは違ったTVシリーズのその後を描いた2次創作ストーリー。

「ふう……………」

公園のベンチに腰掛け、青年が一人溜め息をついた。目の前で、数人の子供が遊んでいる。

そんな光景をぼくっ、と眺めながら、青年はある一人の男のことを考えていた。

自分が唯一友と認めた男。その男は、誰よりも他人のことを考え、また、誰よりも他人のために行動する男だった。そのために、自分が傷つくのも厭わない。

（お前は、今どこで何をしているんだ……………）

青年がそう心の中で呟くと、不意に自分と呼ぶ声が聞こえ、顔を上げた。

「相川」

初老の男だった。白衣に身を包み、ポケットに手を入れて近づいてくる。

「烏丸所長か」

「やあ。何をやっているんだ、こんなところで」

烏丸はそう言いつつ、青年——————相川始の隣に腰掛ける。

「別に。喫茶のお遣いの途中で休憩していただけた」

「その割には、何か考え込んでいたようだったな？」

「……………」

黙り込んだ始に、烏丸は続けて訊いた。

「あいつの……………剣崎のことを考えていたのか？」

烏丸の言葉に一の肩が一瞬震える。

「……………あいつの行方は掴めたのか？」

「いや。BOARDも全力で彼の行方を捜してはいるのだが……………」

「そうか……………済まない」

「いや、私の方こそ。結局、バトルファイトを完全に終わらせる術はまだ分らない。モノリスが一体

どうやって生まれたのか、どのようなものなのか。統制者の意図は一体何なのか。そういったことが分からない以上、どうすることも出来ないだろう。私の推測とて、間違っているとも限らないからな」

バトルファイト。超古代において行われた、世界の覇権を賭けた生物の戦い。アンデッドと呼ばれる、決して死ぬことのない、現在の様々な生物の始祖とされる超生命体達によって行われたそれは、長い戦いの末、ヒューマンアンデッドと呼ばれるアンデッドの勝利に終わった。現在の人類の繁栄は、そのヒューマンアンデッドの勝利によりもたらされたと云われている。

そして四年前、カードに封印されていたアンデッド達が、永い眠りから覚醒した。予てから古代生命について研究していた機関BOA RDは、ライダーシステムという、封印したアンデッドの力を利用することが出来る戦闘システムを開発、これに対抗することとなる。新たなバトルファイトが開始されたのだ。

しかし、超古代に行われたバトルファイトと決定的に違う、ライダーという存在。それは事実、結果に大きな影響を与えたといっても過言ではないだろう。彼らによりアンデッド達は次々にカードに封印されていき、最後に生き残ったのは、ジョーカーという、スペード、ダイヤ、ハート、クラブといったスートに縛られず、封印した他のアンデッドの力を引き出すことの出来る能力を持つアンデッドだった。

バトルファイトにジョーカーが勝利したことで、モノリスはジョーカーの意思とは無関係に、彼に似たアンデッド、ダークローチを次々と生み出し、全生命体のリセットを行った。

そんな中、自分が第二のジョーカーとなることでバトルファイトへの出場権を獲得し、ジョーカーのバトルファイトを再開させるといふ、バトルファイトの穴を突いた方法で人類の危機を救ったのが、仮面ライダーブレイドの適合者、剣崎一真である。

彼は、友であるもう一人のジョーカーと戦わないよう姿を消し、今も、世界のどこかで運命と戦っているのである。

「そうだな。統制者の意図は俺達アンデッドにも分からない。ただ相手を封印し、勝利せよ。それだけだった」

「その為にも、我々は研究を続けねばならない。君や剣崎を、これ

以上苦しませないためにも」

「済まない……………」

始は、再び謝罪を述べた。

「何、気にすることはない。我々も剣崎に帰ってきてほしいのでな。それじゃ、私はそろそろ研究所に戻ろう。またな」

「ああ」

烏丸の後姿を見送ると、程なくして始もまた帰っていった。

「ただ今戻りました」

「あら始さん、ありがとう」

始は、自分が居候している喫茶に帰ると、買い物袋をテーブルに置いた。そんな彼を、喫茶を経営する栗原遥香が迎える。

「ごめんなさいね、始さん。帰ってきてすぐで申し訳ないんだけど、天音迎えに行ってもらえない？」

「天音ちゃん、まだ帰ってないんですか？」

栗原天音。遥香の娘であり、始のことをこの上なく慕っている少女である。

「そうなのよ。学校はもうとっくに終わってる時間なのに………。きつと、また研究所に入り浸ってるんだわ」

「BOARDの研究所ですね。分かりました、行ってきます」

「お願いね」

始は再び喫茶を出て、BOARD研究所へと向かった。

「何だこれは!？」

研究所に着いた始。そこには、凄惨な光景が広がっていた。研究所は無惨にも破壊され、研究員達が倒れ伏している。

「一体何が……………天音ちゃん！」

何が起こったのかは分からないが、もし天音がここにいたのであれば巻き込まれている可能性が高い。始は、天音の姿を探した。

しかし、研究所内をくまなく探したが、彼女の姿はどこにもなかった。

「天音ちゃん……………」

「は、始さん……………」

「! 誰だ!？」

始は声の方向を見回した。すると、瓦礫の下に一人の女性が下敷きになっているのを見つけ、駆け寄って瓦礫をどかす。

「ありがとう、助かったわ……………」

「お前は確か、剣崎の……………」

「広瀬よ。覚えておいて」

「一体、何があった？」

「アンデッドが突然襲ってきて、封印カードが……………」

「……………何だと！」

そこまで話したところで、突然衝撃が彼等を襲った。その方向を見やると、一体の二足歩行の化け物が
ゆっくりと近づいてくるところだった。アンデッドだ。

「こいつは……………」

「何、あれ…………？ あんなアンデッド、見たこともない！」

するとアンデッドが右手を突き出し、再び小爆発が起こる。

「くっ……………」

「始さん、これ！」

広瀬は、一枚のカードを始に投げてよこした。

「これは……………」

アンデッドの封印カードだった。ハートのカテゴリーA、カリスの

カードである。

「変身して！」

「しかし、俺は……………」

「解ってる！ でも、このままだとやられるわ！」

「だ、だが……………」

そして、三度目の爆発。

「迷っている暇はない、か……………」

始は意を決し、立ち上がると、ベルトのバックルにカリスのカードを通した！

『CHANGE』

機械音声とともに、始の体が蠅螂型の形態に変化する。仮面ライダーカリスだ。

「はぁっ！」

カリスは、醒弓カリスラウザーと呼ばれる弓の刃の部分をアンデッドに振り下ろす。まともにくらい、火花が散るそのままカリスは、カリスラウザーを縦横無尽に振った。一撃一撃が、確実にアンデッドの体にダメージとして刻まれていく。

そして、とどめとばかりに大上段から渾身の力で醒弓を振り下ろす！

「はあああああああああああつ！」

アンデッドはその衝撃に火花をあげながら吹き飛び、小爆発を起こした。そして、アンデッドバックルが展開する。戦闘不能となり、封印可能となったのだ。

カリスは、アンデッドの封印されていない、コモンブランクと呼ばれるカードをアンデッドに向かって投げつける。カードはアンデッドに突き刺さり、その身を自身に吸収した。封印完了だ。

アンデッドの収まったカードは、綺麗な弧を描いてカリスの元へと戻った。

「こいつは、一体………？」

戦いの終わりを見届け、広瀬が駆け寄ってくる。

「はい、スピリットのカード」

「ああ」

カリスは広瀬からカードを受け取ると、バックルに通す。

『SPIRIT』

機械音声とともに、カリスの姿が相川始に戻った。

「お疲れ様」

「ああ。……だが、アンデッドは俺と剣崎以外は全て封印され
はずだ。それが何故今も活動を続け
ているアンデッドがいる？」

「分からないわ。……もしかして、トライアルシリーズ？」

トライアルとは、アンデッドの細胞と人間のデータや細胞を組み合
わせて作られた人工のアンデッドで
ある。四年前のバトルファイト時、ある男が己の野望を果たすため
の手駒として開発、その力を発揮している。

「だが、開発者は既に死んでいるはずだ。今あれを作ることが出来
るとしたら、この施設に出入りが可能な者しかないだろう。……
…心当たりのある者はいないか？」

「一応、トライアルの研究をしていた研究者がいるにはいるけど…
……」

広瀬がそう言って指差した方向には、血まみれになって倒れている
男が一人。

「そうか……。それにだ、今のアンデッドは俺も見ることがない。
封印できたということは、おそろ
くトライアルでもないだろう」

「あゝもう、一体何がどうなってるのよ………」
広瀬はそう言って、うな垂れる。その様子を見て思い出したように、
始は自分の用件を切り出した。

「そうだ、天音ちゃんを知らないか？　ここに來ていたかもしれないな

いんだが」

「天音ちゃん？ ううん、来てないけど……………」

「そ、そうか……………」

始は安心して胸を撫で下ろす。

「そういえば、烏丸はどうした？ 俺と会った後、研究所に戻っていったが」

「所長なら、電話がかかってきて血相変えて出て行ったわよ？ よほど重要な電話だったのかしら」

「それなら、取り敢えずは無事ということか……………」

始はひとまず安堵した。彼が生きているのであれば、事態を收拾するのに大きな力となるだろう。

「じゃあ、あとは私がやっておくから、あなたは天音ちゃんを探してあげて」

「いいのか？ こくも大變だろう？」

「心配なんですよ？ いいわよ、アンデッドももういないし。こっちはこっちでやってみる」

「……………解った。だが、何かあったらすぐに呼べ。いいな？」

「解ったわ」

始は頷くと、研究所を駆け出していった。

「全く、あの人も変わったわね。ま、天音ちゃんの影響かな……………」

広瀬は一人苦笑しながら、そう呟いた。

「天音ちゃん、まだ戻ってないんですか？」

「ええ。本当にどこ行っちゃったのかしら、天音……………」

始は、喫茶に戻ってきていた。もしかしたら、天音がもう帰ってきているかもしれないと思ったからだ。しかし、結果はこのとおりであった。

「俺、もう一度探してきます。何かあったらすぐ知らせて下さい」

「ええ、ありがとう。気をつけてね」

遥香の言葉に頷くと、始は再び店の外に出る。

天音を探しに行こうと、バイクに駆け寄る始を、呼び止める影があった。

「相川始、だな？ いや……………」

男は始に向き直り、深く被っていた帽子を脱ぐ。歳は、三十程だろうか。

「ジョーカー、と言い換えるべきかな？」

異様な雰囲気放つその男に、何より自分をジョーカーと呼んだ事実、始は身構える。

「誰だ、お前は」

「名乗るほどの者でもない。いや、名乗る必要もない。お前はここ、私に封印されるのだからな」

そう言う、男の姿がみるみる内に変化していき、『化け物』の姿を形作った。

「アンデッドか……………」

始は懷から、カテゴリーエースのカードを取り出す。と同時に、彼

の腰にベルトが姿を現した。

「変身！」

『CHANGE』

カードをバックルに通す。機械音声が響き、みるみるうちに、始の体がかリスに変化していった。

「ふん……あの方も認める、ジョーカーの力とやらを見せてもらおう！」

二人は同時に、地面を蹴った。

(後書き)

神崎「こんにちは、神崎です」

始「相川始だ」

神崎「SPIRITUAL ARMS及びディケイドAMWにて公募しました新規作品にて応募されましたものを試験的に投稿します。今後の反響によっては、続けるかもしれないし続けないかもしれない。全ては読者様次第です」

始「沢山の読了を待っている」

神崎「それでは！ 今回はこれで♪」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2094k/>

仮面ライダー剣 Another Tale

2010年10月11日02時25分発行